幕末の陽明学と梁啓超

李　亜*

はじめに

19 世紀 90 年代頃から 20 世紀初頭にかけて、近代中国の知識人はアジア初の近代化を遂げた国である日本を見本にして、その近代化の経験を自らの近代化に活かそうと試みた。この中で、維新派の康有為や梁啓超は明治維新の成功が幕末の志士のたまものだとしていた。

1890 年から同郷の康有為の門に入り、翌年同氏によって創立された「万木草堂」に入学した梁啓超は師康有為のもとで、明治維新や幕末志士のことに関心を寄せるようになった。[1]例えば、梁啓超は「記東侠」[2]（1897 年）や「南学会叙」[3]（1897 年）などで、幕末志士の精神を称え、それを以って中国人の士気を鼓舞しようと試みた。また、梁啓超は「万木草堂」時代から陸王心学に傾倒した師康有為のもとで、『明儒学案』[4]を勉強し始めた。ところで、梁啓超の陽明学勉強は知識のレベルで止まることなく、教育の場でも大いに活かされていた。[5]

このように、梁啓超は日本亡命以前から幕末の志士精神と陽明学に別々に関心を寄せていたが、陽明学こそが幕末志士の精神や行動を支えたものだとは主張しなかった。ところが、日本亡命の 5 年目にあたる 1902 年から、梁啓超は陽明学こそが幕末志士に大きな影響を与え、明治維新の原動力となったと強調するようになった。1904 年から 1906 年にかけて、梁啓超は「論私徳」や『徳育鑑』、『節本明儒学案』、『松陰文鈔』など陽明学に関する文章や著作を次々と世に出し、陽明学を近代国家の国民の創出に相応しい伝統的な思想資源として大いに顕彰した。要するに、梁啓超は日本亡命後、そこで「幕末の陽明学」を発見し、それを通して自らの陽明学理解を充実させたのみならず、更にそれを陽明学顕彰の根拠の一つとしていたのであると言っても過言ではなかろう。そのために、梁啓超の「幕末の陽明学」理解への探求は梁啓超の陽明学顕彰や明治維新観、明治思想からの影響を理解するためのアプローチになると思われる。

従来、梁啓超は明治日本の思想を通して、西洋の近代思想を受容したと、中日両国の研究者たちによってしばしば指摘されているが、その一方で梁啓超が明治思潮を通して日本の幕末・明治思想を通して、中国思想を再認識したという視点から、梁啓超と日本の幕末・明治思想との関わりを考察する研究はまだ十分に行われていないようである。[6]特に、梁啓超の「幕末の陽明学」理解について、まだ研究の余地が残されている。

さて、梁啓超の「幕末の陽明学」理解を取り上げて考察を行った先行研究をまとめると以下の通りである。狭間直樹氏は梁啓超による「幕末の陽明学」発見や陽明学顕彰は井上哲次郎から深い影響を受けたと主張している。[7]竹内弘行氏は梁啓超から見れば、陽明学の「知行合一論」から多大な影響を受けた「武士道」こそが明治維新に成功させたものだと主張している。[8]荻生茂博氏は梁啓超らは明治知識人によって唱えられた明治維新の原動力は陽明学にあったとの説に接し、それを受容したと指摘している。[9]ところが、以上の先行研究において、梁啓超の「幕末の陽明学」理解と明治思想との繋がりについては論じられているが、梁の幕末の陽明学」理解の中身についてはまだ明らかにされていないほか、文献による実証的なアプローチも十分に行われていないようである。

*北京外国語大学　北京日本学研究センター　博士後期課程２年

本稿では主に思想史的文脈と歴史的文脈で、梁啓超の文章に見られる幕末の陽明学に関する論説を通して、梁啓超による「幕末の陽明学」理解の全体像を構築するとともに、梁啓超に「幕末の陽明学」を発見させた直接的な刺激を探求してみたい。

１、「幕末の陽明学」の発見

梁啓超が最初に陽明学を幕末志士の精神や行動の支えとしたのは 1902 年の『新民叢報』に掲載された「論宗教家与哲学家之長短得失」なのである。梁啓超はこの文章において、宗教の哲学に対する優越性を強調し、一国の改革に役立つのは宗教思想だという結論を出している [10]。また、日本の場合は「维新前诸人物如大盐中斋、横井小楠之流，皆得力于禅学者也。西乡隆盛其尤著也。其所以蹈白刃而不侮，前者仆后者继者，宗教思想为之也。」[11] と、幕末志士の精神も禅学から来ていると主張している。

興味深いことに、梁啓超は同じ文章で唯心哲学も広義の宗教の一種であると指摘したうえで、わが国の「王学」（即ち、陽明学）が最上等の宗教であり、明治維新の成功も陽明学によるものだという理解を示した。

> 唯心哲学，亦宗教之类也，吾国之王学唯心派也。苟学此而有得者，则其人必发强刚毅，而任事必加勇猛，观明末儒者之风节可见也。本朝二百余年，斯学销沈，而其支流超渡东海，遂成日本维新之治，是心学之为用也。心学者，实宗教最上乗也。[12]

つまり、陽明学を身に付けたものは意志が揺るぎなく、大事な任務に当たる時に必ず勇猛であるという性質を持つ。それは明末の儒者の気骨を見れば分かることである。心学は中国でこの二百年余りの間徐々に衰えてきたが、その支流は東海を渡って、日本の明治維新を成功させたのである。

要するに、梁啓超から見れば、禅学と陽明学、そして幕末志士の精神という三者には共通的な性質が潜んでいると言えよう。では、梁啓超から見れば、この三者は一体どんな共通性を持つのか。それは「至誠」だと考えられる。紙幅の制限で、詳しい説明は展開しないことにする。そして、1902 年の『新民叢報』に掲載された『論自由』にも明治維新は陽明学か禅学によるものだというような理解が見られる。[13]

ところが、1903 年になると、梁啓超は「論私徳」[14] で「彼吉田松阴、西乡南洲辈，皆朱学、王学之大儒也。」[15] と、陽明学と志士とのつながりを指摘したうえで、陽明学を国民の道徳を向上させる有力な資源として、陽明学顕彰に取り組み始めた。また、1905 年 12 月に『新民叢報』の臨時的な増刊として発表された『徳育鑑』においては、梁啓超は陽明学こそが幕末志士の精神や行動の支えと主張するようになった。

> 而其维新以前所公认为造时势之豪杰，若中江藤树，若熊泽藩山，若大盐后素，若吉田松阴，若西乡南洲，皆以王学式后辈，至今彼军人社会中，尤以王学为一种之信仰。夫日本军人之价值，既已为世界所共推矣，而岂知其一点之精神教育，实我子王子赐之也。我辈今日求精神教育，舍此更有何物。抛却自家无尽藏，沿门托钵效贫儿，哀哉 [16]

つまり、明治維新まで時勢を作り出した豪傑たち（例えば、中江藤樹、熊沢藩山、大塩中斎、吉田松陰、西郷隆盛など）は悉く陽明学を以って後輩の見本にしていた。また、現在の日本の軍人も依然として陽明学を信仰している。今のわれわれは精神教育の資源を求める際、陽明学を措いて何があろうか。

ここからも窺えるように、梁啓超の「幕末の陽明学」理解は自らによる陽明学顕彰の根拠ともなっている。梁啓超は日本亡命後、幕末志士の精神

を追究する際に、幕末の陽明学を発見し、更にそれを根拠にしながら、陽明学をわが国の「精神教育」に活かそうとしたと言えよう。ここからは梁啓超の「幕末の陽明学」を通して、自らの陽明学理解を充実させながら、陽明学を以って幕末志士のような国の独立に貢献できる志士を養成しようとした心情が窺える。

２、泰州学派と幕末志士

上述したように、梁啓超は「論宗教家与哲学家之長短得失」で陽明学の「支流」が明治維新を推し進めたと主張している。明末・清初の黄宗羲の『明儒学案』によると、陽明後学としては浙中王門、江右王門、南中王門、楚中王門、北方王門、粤閩王門、止修学派、泰州学派などの支流があげられているが、梁啓超から見れば、明治維新に貢献したのは一体この中のどの学派なのであろうか。それについては梁啓超による『節本明儒学案』[17]から梁啓超の理解が読み取れる。そこにおける「泰州学案」の「眉批」にはこのようなコメントが書き付けてある。

> 阳明之教，即知即行，不行不得谓之知。泰州诸贤，以非常之自信力，而当下即行其所信。阳明活用孔孟之学，泰州又活用阳明学之学者也。必如泰州，然后阳明学乃真有关系于社会于国家也。（中略）日本自幕府之末叶，王学始大盛，其著者曰大平中斎，曰吉田松阴，曰西乡南洲，曰江藤新平，皆为维新史上震天撼地人物。其心得及其行事，与泰州学派盖甚相近矣。[18]

ここでは、梁啓超は泰州学派を陽明学を活かした学問だと位置づけたうえで、泰州学派の賢人たちは並ならぬ「自信力」を以って、自らの信念を直ちに実践に移すほか、社会や国家に大いに関わっているという特質を持つと評価している。また、幕末以来の陽明学者（大塩中斎、吉田松陰、西郷南洲、江藤新平）の思想や行動は泰州学派と甚だ近いと梁啓超が考えている。

では、梁啓超はなぜこのように主張していたのか。それは梁啓超が吉田松陰の泰州学派の李卓吾への傾倒[19]を把握していたからと思われる。松陰の『幽室文稿』において自らの李卓吾への傾倒が真摯に書き記されている。それゆえに、万木草堂時代から松陰の『幽室文稿』を必読書とされてきた梁啓超は日本亡命以前から松陰の李卓吾への傾倒を十分に把握していたことが考えられる。

それについては、梁啓超によって編纂された『松陰文鈔』(1906 年　上海広智書局より刊行)[20]において、何箇所の証拠が残っている。そのページ番号の順序を追ってまとめると、次のような四箇所がある。

> 向为足下，为子大说，多事卒卒，不能尽所怀焉。偶读李氏焚稿，遇此文，说大字极透。故録寄之足下。[21]
>
> 吾尝读王阳明传习录，颇觉有味。顷得李氏焚书，亦阳明派。言言当心，向借日孜，以洗心洞劄记。大盐亦阳明派。取观为可，然吾非专修阳明学，但其学真，往往与吾真会耳。[22]
>
> 诚得如李卓吾而师之，一世高人物矣。[23]
>
> 从前之怒气，稍稍和平矣。因把李卓吾书读之，得逆则相反顺则相成八字。反覆益喜。[24]

梁啓超の『松陰文鈔』の編纂目的は恐らく幕末の陽明学、あるいは松陰の陽明学理解の宣伝ではなかろうが、梁啓超が日本亡命以前からすでに松陰の李卓吾への傾倒を十分に把握していたことは否定できないと言えよう。

面白いことに、筆者の考察したところによると、梁啓超の全体的な思想から見れば、『節本明儒学案』における泰州学派に対する積極的な評価はそれ以外に滅多に見られない。むしろ、泰州学派のことを「王学末流」と称して、それが実践や実用とかけ離れた学問だと否定的に捉えた主張のほうは圧

倒的に多い。[25]このような批判は以上挙げた『節本明儒学案』における泰州学派が社会的な実践力に富む性質を持つという評価とは相反していることが分かる。その一方で、梁啓超は泰州学派を批判しながら自らの学説を展開した江右王門や劉宗周に対しては、一貫して積極的に評価している。

では、幕末の陽明学、或いは幕末志士の陽明学は本当に梁啓超が主張した通りに陽明後学の泰州学派のほうに近いのか。

岡田武彦氏による「幕末の陽明学」に関する解説 [26]によると、幕末の陽明学の世界において、東沢潟や奥宮慥斎、吉田松陰のような「現成派」（『明儒学案』における泰州学派にあたる）を信仰する人物を除いて、林良斎（大塩中斎の弟子）や吉村秋陽、山田方谷、春日潜庵、池田草庵のような帰寂派(『明儒学案』における江右学派にあたる）や修証派(修証派に分類された人物は『明儒学案』の「江右学派学案」と「浙中王門学案」にともに見られる）に親近感を感じ、そこから大きな影響を受けた人物は少なくなかった。この中で、泰州学派を「猖狂者」と批判して、「誠意」の思想を以ってその弊害を防ごうとした蕺山学派の創始者劉宗周の「誠意」説や「慎独」説にかなり好感を抱いていた学者も少なくなかった。

以上、岡田氏によって挙げられた幕末の陽明学者のうちに、吉村秋陽や春日潜庵が尊皇攘夷の幕末志士であることから、陽明学を信仰した幕末の志士において、泰州学派から影響を受けたものもいれば、江右学派や蕺山学派にかなり好感を抱いたものもいると言えよう。そのために、梁啓超による幕末志士が泰州学派のほうに近いという理解は偏っている傾向があるのではないかと思われる。

３、「幕末の陽明学」発見のきっかけ

上述したように、日本亡命以前の梁啓超は幕末志士と陽明学に別々に関心を寄せたが、両者のつながりにはまだ気づいていなかった。梁啓超が「幕末の陽明学」を発見したのは日本亡命後のことである。このように、梁啓超は明治日本の思想から一体どんな影響を受けて、「幕末の陽明学」を発見したのか。結論から言ってしまうと、梁啓超による「幕末の陽明学」発見のきっかけとして、明治時代における陽明学顕彰運動、とりわけそこにおける国家主義者井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』から受けた刺激は最も大きかったと思われる。ところで、井上氏の『日本陽明学派之哲学』を著したモチベーションは明治日本の功利主義という風潮の弊害を防ぎ、「国民道徳」の発達に貢献することにある。梁啓超による陽明学に関する文章において、この著作の観点を引用したり、参考したりするところは少なくない。

まず、「１、『幕末の陽明学』の発見」でも述べたように、梁啓超は『徳育鑑』において「而其维新以前所公认为造时势之豪杰，若中江藤树，若熊泽藩山，若大盐后素，若吉田松阴，若西乡南洲，皆以王学式后辈」[27]と主張している。ここで挙げられた人物はほとんど井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』の序論に書いてある「又熊沢藩山の如き、大塩中斎の如き、佐久間象山、吉田松陰の如き、若しくは西郷南洲の如き、皆事功の観るべきものあり。」[28]から佐久間象山を除いて、そのまま参考したものだと考えられる。ただし、梁啓超は井上の「事功の観るべきもの」を中国語の「造时势之豪杰」で表現したのである。

また、梁啓超は『節本明儒学案』の「泰州学案」の「眉批」のところで、井上氏の『日本陽明学派之哲学』の結論を中国語に翻訳した上で、自分のコメントを書き加えている。

> 井上哲次郎著一书曰（日本阳明派之哲学），其结论云王学入日本则成为一日本之王学成活泼之事迹，留赫奕之痕迹优于支那派远甚（原著六二七页）。嘻，此殆未见吾泰州之学派之学风焉尔。抑泰州之学其初起气魄虽大，然终不能敌一般之舆论，以致其传不能永，则谓活泼

赫奕者,其让日本专美,亦宜接其传而起其衰,則后学之责也。[29]

下線部は訳文で、後ろはコメントである。訳文にあたる原文は以下の通りである。

然れども日本の陽明派は実に活溌なる事跡を成し、赫奕たる痕跡を留め、支那の陽明派に優ること遠しとなす。[30]

また、梁啓超は以上の引用文に続いて、井上氏の結論の一部にあたる「陽明派の人、論著甚だ少きも、彼等の行状は著書に代はるべきもの。而して著書よりも反りて人に教ふること多しとす。知行一致が彼等の主義なるが如く、彼等はその知る所を実行せり、故に彼等の行状は彼等の知る所を発見するものにて、実に彼等の論著を代表するに足りるものなり。是故に、彼等の行状は十分学者の研究を価するに足るなり。」[31]を以下のように翻訳している。

井上氏又云，阳明派之人著率少其行状即代著书且所以感化人者，比著书之效果更大，盖彼等以知行合一为主义，常实行其所知，故所行即所知之发现也。观其学术当于此焉求之。[32]

要するに、梁啓超は井上氏による陽明学顕彰に接してから、そこから大いに示唆を得て、自らの陽明学顕彰に取り組んだと言えよう。つまり、梁啓超から見れば、日本に伝わったわが国の陽明学は幕末志士の精神や行動を支え、明治維新を推し進めたという役割を果たしたので、幕末志士のようにわが国の近代化への道を切り開く、自信や「至誠」、そして行動力などの性質を持つ愛国の志士を養成するための養分になるわけである。言い換えれば、つまり梁啓超は「幕末の陽明学」を通して、陽明学に潜まれた行動力、「至誠」、「独立」といった性質を発見し、更にそれらに政治的な現実的意義を付与したのである。

要するに、梁啓超の「幕末の陽明学」発見や陽明学顕彰のきっかけは井上氏の陽明学顕彰をはじめとする明治陽明学ブームにあると思われる。ところが、それはあくまでも「きっかけ」にすぎないということは見逃せない。梁啓超に陽明学顕彰に取り組ませたもっとも有力なエンジンはやはり清末からの陽明学復興だと思われる。清末から、陽明学はすでに龔自珍、魏源などによって、すでにそこに潜んでいる「独立」や「心力」（簡単に言えば、即ち人間の意志の力である。）といった近代的な要素が発見されるほか、康有為によってその道徳修養における役割が見出された。「はじめに」のところでも紹介したように、梁啓超も日本亡命以前から師康有為のもとで陽明学を道徳修養の資源として重んじるようになった。要するに、梁啓超による陽明学顕彰の背景として、清末からの陽明学復興がその内発的なエンジンであるのに対して、明治陽明学は外発的な刺激だと言えよう。

また、ここから陽明学に含まれた近代的な思惟は近代中日の知識人たちにともに発見されたと窺える。ところが、ここで注意すべきなのは両国の近代知識人たちによって、「陽明学」が付与された現実的な意義は共通点もあれば、相違点も少なくない。それについては今後の課題として残したい。

終わりに

梁啓超は日本亡命以前から幕末の志士精神と陽明学に別々に関心を寄せていたが、陽明学こそが幕末志士の精神や行動を支えたものだとは主張しなかった。日本亡命の5年目にあたる1902年から、梁啓超は陽明学こそが幕末志士に大きな影響を与え、明治維新の原動力となったと強調するようになった。梁啓超は「幕末の陽明学」を通して、自らの陽明学理解を充実させながら、陽明学を以って幕末志士のような国の独立に貢献できる志士を養成しようとした。

また、梁啓超は陽明学を信仰した維新志士の思想や行動が「泰州学派」に近いと主張している。それは梁啓超が吉田松陰の泰州学派の李卓吾への傾倒を把握していたからと思われる。ところが、陽明学を信仰した幕末の志士において、泰州学派から影響を受けたものもいれば、江右学派や蕺山学派にかなり好感を抱いたものもいるので、梁啓超のこの捉え方は偏っているのではないかと思われる。

また、梁啓超の「幕末の陽明学」発見や陽明学顕彰のきっかけは、井上氏をはじめとした明治知識人たちによる陽明学顕彰にあると言えるが、梁啓超による陽明学顕彰は清末からの陽明学復興に遡ることがである。

そして、近代中国の思想史において、章炳麟や孫中山をはじめとする知識人たちも陽明学が明治維新の原動力だと理解していた。それゆえに、この説は近代中日の思想史における共通認識であると言えよう。また、梁啓超の「幕末の陽明学」発見を通して、陽明学が明治維新の原動力だという説を受容した知識人も少なくなかったと思われる。それについては、今後の課題として残したい。

註

[1]　郭連友（2007 年）「第七章 梁启超与吉田松阴」『吉田松阴与近代中国』、中国社会科学出版社　参照

[2]　梁啓超（1989 年）「記東侠」、『飲氷室文集』之二、中華書局、p29－31。この文章は 1897 年の、『時務報』に掲載された文章で、そこで梁啓超は日本の幕末志士のことを「東侠」と称して、彼らの事跡や精神を称えた。

[3]　梁啓超（1989 年）「南学会叙」、『飲氷室文集』之二、中華書局、p64－66。1897 年に湖南省の南学会の創立に際して書かれた序文で、翌年の『時務報』に掲載。そこで梁啓超は日本の明治維新が「薩長土肥」の四藩の志士の「士気横溢、熱血奮発」といった精神のたまものだとして、彼らに劣らぬ「任侠尚気」の精神に富んだ湖南人に先頭に立って中国の独立を守るようにと呼びかけた。

[4]　明末・清初の思想化黄宗羲の著した明代哲学史。王守仁（陽明）及びその門下を中心にすえて、陽明学の発展を体系的に編纂した。

[5]　①1892 年の「読書分月課程」（梁啓超（1936 年）飲氷室専集』之六十九、中華書局、P1－15）の「理学書」の一覧で、程朱学派の書物より陸王学派のが先にリストアップされ、道徳修養の面で陸王学派のほうが重んじられていることが窺える。②1897 年の「万木草堂小学学記」（梁啓超（1989 年）「万木草堂小学学記」、『飲氷室文集』之二、中華書局、p33－35）と「湖南時務学堂学約」（梁啓超（1989 年）「湖南時務学堂学約」、『飲氷室文集』之二、中華書局、p23－29。）は「立志」と「養心」など陽明学に重んじられる条目を最も重要な条目として取り上げている。③亡命直後の 1899 年に、「養心語録」（『自由書』の一節。梁啓超（1989 年）「養心語録」、『飲氷室専集』之二、中華書局、p35。）を著した。

[6]　筆者の考察したところによると、梁啓超の日本の幕末・明治思想による中国思想への再認識という視点から論述を展開した先行研究として以下の論文があげられる。①狭間直樹（1999 年）「『新民説』略論」、狭間直樹編『梁啓超　西洋近代思想受容と日本』みすず書房。 ②末岡宏（1999 年）「梁啓超と日本の中国哲学研究」、狭間直樹編『梁啓超　西洋近代思想受容と日本』、みすず書房

[7]　狭間直樹（1999 年）「『新民説』略論」、狭間直樹編『梁啓超　西洋近代思想受容と日本』みすず書房

[8]　竹内弘行（2001 年）「近代儒教与知行論」、『歴史教学』第 9 期、P9－11

[9]　荻生茂博（2008 年）『近代・アジア・陽明学』ぺりかん社、P335-386

[10]　梁啓超（1989 年）「論宗教家与哲学家之長短得失」、『飲氷室文集』之九、中華書局、P45―46。原文：「历史上英雄豪杰，能成大业轰轰一世者，殆有宗教思想之人多，而哲学思想之人少。（中略）革新国是者，宗教思想为之也。」。引用資料中、旧漢字は現代漢字に改めた。以下同じ。

[11]　同上、P45。

[12]　同上、P46。下線部は筆者が付したもの。

[13]　「日本维新之役，其倡之成者，非有得于王学，即有得于禅宗」。梁啓超（1989 年）『新民説・論自由』、『飲氷室文集』之九、中華書局、P50。

[14]　1903 年に『新民叢報』に連載された名文『新民説』の一節である。

[15]　梁啓超（1989 年）「論私德」、『飲氷室文集』之九、中華書局、P132。

[16]　梁啓超（1989 年）『德育鑑』、『飲氷室専集』之二十六、中華書局、P42。下線部は筆者が付したもの。

[17]　梁啓超（1917 年）『節本明儒学案』、商務印書館。1904 年、梁啓超は姉に亡くなられて、気分がすぐれていなかったとき、『明儒学案』を読むことによって、心を落ち着けたので、そこから抜粋して、1905 年に刊行された書物である。そこの「眉批」には梁啓超自身の「按語」（文章や語句につけた注者の意見）も書き加えてあ

りますので、当時の梁啓超の陽明学理解を反映した貴重な史料だと言えよう。

[18] 梁啓超（1917 年）『節本明儒学案』商務印書館、P351－352。「大平中斎」は「大塩中斎」の誤写だと考えられる。

[19] 吉田松陰は 1850 年に陽朱陰王と呼ばれた佐藤一斎に師事した陽明学者の葉山佐内（1796～1864）に師事したのをきっかけに、『伝習録』・『大学古本旁釈』・『王文成公年譜』・『洗心洞劄記』等の陽明学関係の書物に心酔するようになった。なかんずく李卓吾に傾倒し、安政 6 年（1859）野山嶽中に李氏の『焚書』、『續藏書』を読んで、会心の部分を抄録し、「李氏焚書抄」、「李氏続藏書抄」を作っている。至誠または誠という性質を持ち、尚且つその言葉を最も愛した松陰が「童心」（真心、最初一念の本心である）説を唱えた李氏に傾倒し、それを自らの思想に取り入れたのである。荒木見悟 [ほか] 編（1972 年）『陽明學大系　第 9 巻』明徳出版社　参照

[20] 『松陰文鈔』は梁啓超によって『幽室文稿』から松陰の書簡・詩・文を抜粋しながら、会心の言葉の傍らに「○」を付けたり、「眉批」のところでコメントを記したりして、日本の「新精神」の誕生に大いに貢献した松陰精神の特質を見出し、更にそれを顕彰することによって、中国人を励まそうとするために完成された書物である。

[21] 吉田寅次郎著　梁啓超節抄（1906 年）、「书李卓吾刘肖川书后决子大」、『松陰文鈔』上海広智書局、P55。下線部は筆者が付したもの。

[22] 「语子远 正月念七夜」、同上、P62。下線部は筆者が付したもの。

[23] 同上、P65。下線部は筆者が付したもの。

[24] 「與士毅」、吉田寅次郎著 梁啓超節抄（1906 年）「书李卓吾刘肖川书后决子大」、『松陰文鈔』、上海広智書局、P69。下線部は筆者が付したもの。

[25] ①1902 年の『新民叢報』に掲載された「論中国学術思想変遷之大勢」には「但王学末流，狂恣滋甚，徒以一二口头禅相尚，其对于自己也，去实践愈远，其对于社会也，去实用愈远。」と書いてある。（梁啓超（1989 年）「論中国学術思想変遷之大勢」、『飲氷室文集』之九、中華書局、P50　参照）②1924 年の「中国近三百年学術史」に何心隠や李卓吾の思想を「把个人道德、社会道德一切藩篱都冲破了」と批評した。（梁啓超（1989 年）「中国近三百年学術史」、『飲氷室専集』之七十五、中華書局、P4　参照）など。

[26] 岡田武彦（1972 年）「幕末の陽明学と朱子学」、『陽明学大系第 10 巻　日本の陽明学（下）』、明徳出版社、P11－41

[27] 梁啓超（1989 年）『徳育鑑』、『飲氷室専集』之二十六、中華書局、P42。

[28] 井上哲次郎（1900 年）、「叙論」、『日本陽明学派之哲学』、冨山房、P5

[29] 梁啓超（1917 年）『節本明儒学案』、商務印書館、P352－353。下線部は筆者が付したもの。

[30] 井上哲次郎著(1900 年)『日本陽明学派之哲学』、冨山房、P627

[31] 同上

[32] 梁啓超（1917 年）『節本明儒学案』、商務印書館、P354－355

参考文献

荒木見悟 [ほか] 編（1972 年）『陽明學大系　第 9 巻』明徳出版社　参照

井上哲次郎(1900 年)『日本陽明学派之哲学』　冨山房

大橋健二（1999 年）『良心と至誠の精神史』　勉誠出版

岡田武彦（1972 年）「幕末の陽明学と朱子学」、『陽明学大系第 10 巻　日本の陽明学（下）』　明徳出版社、P11－41

荻生茂博（2008 年）『近代・アジア・陽明学』　ぺりかん社

郭連友（2007 年）『吉田松阴』、中国社会科学出版社

黄克武著（2006 年）『一个被放弃的选择：梁启超调适思想之研究』　新星出版社

黄克武（2013 年）『近代中国的思潮与人物』　九州出版社

呉雁南（1996 年）『阳明学与近世中国』　貴州教育出版社

呉義雄（2004 年）「王学与梁启超新民学说的演变」、『中山大学学报（社会科学版）2004 年第 1 期』　中山大学、P62-69

解玺璋（2012 年）『梁启超传上下部』　上海文化出版社

石雲艶（2005 年）『梁启超与日本』　天津人民出版社

孫徳高・張梅（2008 年）『梁启超的新民思想与阳明心学』、『阳明学刊（第三辑）』　貴州大学中国文化書院、P370-395

竹内弘行（1994 年）「梁启超与“阳明学”」、『传统文化与现代化 1994 年第 1 期』　国務院古籍整理出版規划組 P92－95

張灝著　崔志海・葛夫平訳（2006 年）『梁启超与中国思想的过渡（1890—1907）』　新星出版社

鄭匡民（2003 年）『梁启超启蒙思想的东学背景』　上海書店出版社

狭間直樹著（1998 年）「关于梁启超称颂“王学”问题」、『歴史研究　1998 年第 5 期』　中国社会科学院　P40-46

狭間直樹編（1999 年）『梁啓超　西洋近代思想受容と日本』　みすず書房

梁啓超（1936 年）、『飲氷室合集』　中華書局

梁啓超（1989 年）、『飲氷室合集』　中華書局

梁啓超（1917 年）『節本明儒学案』　商務印書館

吉田寅次郎著　梁啓超節抄（1906 年）『松陰文鈔』上海広智書局